九州産業大学国際文化学部紀要　第 37 号　157－163（2007）

# 徐復観の現代日本批評

石　川　泰　成

## 1　はじめに

清末から民国にかけて多数の中国人が日本に留学や政治的迫害から逃れて渡日した。

彼らが帰国後，維新運動期から抗日時期にわたり，各界で大きな指導的作用を果たしたことはよく知られている。これら代表的人物に孫中山，梁啓超，魯迅があげられる。中国思想の分野でも，中国現代新儒家第二世代とよばれる主だった人物たち，張東蓀，張君励，徐復観が日本への留学経験者である。彼らが近代において日本で何を学び，帰国後どのような思想活動を展開し，そこに日本での留学体験や留学体験から得た日本観に関する言説を追いかけてみることは，「近現代の思想空間としての日本」という観点から興味深いものがある。とくに現代儒家たちが直接体験や日本という他者を観察したとき，彼らの主張する現代儒学の現代性と儒教思想の特質の輪郭をあらわにするのではないか，あるいは浮かび上がらせるのではないかと論者は考えている。

まずその嚆矢として本論で，戦前の日本留学，1950，51年に短期滞在，1960年には六ヶ月の長期滞在経験のある徐復観を取り上げて，彼が日本で何を学んだか，現代儒家として現代日本にどのような批評しているか論じてみたい。

## 2　徐復観の日本留学体験

徐復観（1903～1982），旧名は秉常，復観は熊十力が付けた後名，字は佛観，湖北省の生まれ。彼は農村の没落地主の家に生まれ，父は村の私塾で教鞭を執る在村知識人であったが，その家塾経営だけでは一家の生計を支えられず，母の養豚，機織り等でなんとか家計を維持したという。徐復観は後年，自らを「大地の子」と称したが，それは貧困の中で，自ら五，六歳のころから放牛，芝刈りや農作業を手伝った実感によるものである。ただ，父からは四書五経などの伝統的古典学習の教育を授けられた。父の影響もあって，その後も武昌第一師範学校，さらに国学館でと継続して中国古典の教育を受けた。しかし，1926年ごろ，徐復観は魯迅の著作に触れ，瞬く間に「魯迅迷」となり「しだいに線装本に対して，さらにはすべての中国文化に対して大きな反感が生じ」①，中国古典へ興味を急速に失なった。加えて徐復観は，混迷する

当時の中国の国家，社会に対し絶望をいだいた。徐復観は，自分を形成してきた伝統が崩壊しつつあるとき，彼の精神の彷徨に喘えいでいるとき，当時の偶像魯迅と同じ日本留学の機会を手に入れたのであった。

1928年3月，湖北の軍閥の子弟ら一行とともに日本の陸軍士官学校に入学する目的で来日した。しかし，当の派遣元の軍閥が湖北省漢口の日本租界地を封鎖するなど反日・排日貨運動を展開したため士官学校から警戒されて入学許可が下りず，やむなく一旦，成城学校日本語クラスに在籍して日本語を学んだ。日本語学習を続けるうち，彼は軍事方面より経済学に興味を持ちはじめ，河上肇『経済学大綱』を読んでからは河上肇に心酔し，経済学を専門に学ぼうとして明治大学経済学部に入学した。ところが経費を支弁していた湖北の軍閥が失脚したため，徐復観らは経済的問題が生じ，やむなく当時の日本政府との関係が良好だった馮玉祥系の駐日代表馬伯援に同じ湖北出身という縁を頼って留学継続のための援助を相談し，どうにか馮玉祥名義の推薦をもらって，陸軍士官学校歩兵科中華隊二十三期に入学することができた。彼は士官学校入学後も河上肇の著作を読み耽り，さらにはマルクス・エンゲルスの著書やソビエト連邦の理論家たちの著作を愛読した。これらマルクス関連書を読むうちに，国民党・共産党以外の第マルクス主義を現実の中国の政治勢力に適合した第三の政党を作り政局の打開と出来ないものかと考え，読書サークル「群不読書社」を組織して「マルクス主義の旗の下で」などを仲間たちと会読した。②この「群不」とは『論語』の「君子は群して党せず」に基づくことばで，党派による争いを打開するため，「勤労大衆」を主体とする政党の出現を考えていたと晩年に述懐している。③また，この日本留学時に学んだ社会主義，共産主義思想は，彼が思想面では中国儒学への復帰をし，現代儒家として活動したのちも深い影響を与え，現代儒家の政治的運動のありかたには，社会民主主義政党的なありかたを考えていたようである。ただ，徐復観は時局を論じた評論集をのぞくと，当時のソビエト連邦のロシア共産党や中国共産党などマルクス・レーニン主義への激しい反対と抵抗を終始展開しているに比して，ヨーロッパのなかでも資本主義社会のなかでの社会主義政党への関心や日本社会党への細かな評論と分析を行い民主社会主義に期待を込めていたのが看取できる。

さて話をすこしもどそう。1931年九・一八事変が勃発したさい，日本への抗議と祖国を救うため，徐復観は士官学校を退学し，すぐさま中国に帰国した。彼は帰国後すぐに，東京で考えていた第三勢力の政治団体「開進社」を組織したが二，三度会議を開いただけで霧散してしまった。開進社の失敗の後，徐復観は軍に身を投じ，高級参謀，少将と累進して軍，政治と深くかかわるが，1944年に熊十力に出会い，再び中国古典研究に興味を持ち，1949年に政界を完全に離脱した。

彼が帰国後企てた，国共以外の第三の政治勢力を生み出し国共の調和を図ろうという思想活動は現代儒家の第一世代梁漱溟や張君励ら民主同盟の考えに近く，この儒教と社会主義の親和性が現代新儒家の政治思想というテーマから見ても興味深い。同じ現代新儒家第二世代の張君励も日本で社会主義を学び，中国に帰国後，国家社会主義の運動を展開した共通点をもち，先ほど述べた「思想空間としての近代日本」の役割のなかで非マルククス型の社会主義というテーマから論じること整理できる興味深いものがあるが，ここでそのところまで論議を広げる準備が論者にはない。いまとりあえず，徐復観の日本批評と日本観に絞ってみてゆくこととしたい。

## 3　徐復観の日本批評

### 3－1　儒教的批評精神と日本評論の意義

徐復観の日本に対する評論は大きく分けて時事・政治に関するもの，日本文化・日本民族性に関するものに分類できる。時事・政局を論じては，日米関係，日ソ・日中関係という大局論じたもの，造船疑惑，連合赤軍事件，ロッキード事件といった個別案件まで多彩である。『徐復観文集』第五巻，巻末に収める著作編年目録から日本を題名に挙げた評論だけでも五十篇以上にのぼる。現在，国際関係論の専門家は別として，中国の中国思想史研究者でここまでの領域で現代日本を論じ切ったものはいないであろう。さらに言えば，現在の中国人・日本人の中国思想史研究者が対象国あるいは自国に対して同時代的論評することは極めて少ない。なぜなら普通，思想史研究者は学問の客観性という近代的学問観から，対象の歴史時代区分や人物に沈潜することを本分とし，自分の思想史研究の成果をもって現在，未来へ向けた発言をも己の営為の領分することは，本分からの逸脱にあたる感覚に襲われ抵抗を感じるからである。とくに中国の伝統思想の復権を唱える現代新儒家，わけても第三世代たちには中国本位的傾向が強い。

しかも，中国思想研究者は研究の科学的客観性の制約から自分の生きる現代への関心を向けることが少ない。中国思想を現代に復権することを標榜する新儒家たちでも，古典重視を唱えて伝統回帰を促すものの，「現代」社会そのものへの関心が薄く，つねに身を古典的世界に置き現代を論評する姿勢が強い。現代とはいかなる時代か，なぜ現代について論じなければならないのか。中国古典研究に回帰した徐復観がなおも現代について批評活動することに対して，「時代に身をおくものにとって，押さえつけられた良心が政治性の文章を書かずにいられない」④からでだと言い，彼は一週間のうち五日間は古典研究を通じて古人と向き合いながらも，残りの一日半，二日は現代と向き合う生活を生涯にわたり送った。それは1958年元旦に牟宗三，張君励，唐君毅らと共同で「為中国文化敬告世界人士」なる宣言を発し，現代新儒家たること

を任じるものにとっては「現代」が如何なる時代であるか正確に把握し，現代が直面する諸問題に対処することを儒家の当然の責務と考えていたからである。儒家の伝統を自覚的に継承する徐復観にあっては，現代中国であれ現代日本であれ，人類の危機に面している局面・事象について評論し，その病原を治癒することこそ，儒家本来の正しい心のあり方である「憂患意識」あるいは「仁」の発現行為だったわけである。

具体的に徐復観の日本批評を見てゆこう。徐復観は，1960年の日本滞在に際し「東京通訊」と題する随筆を十篇にわたり連載し，格好の日本評論をなしている。そのうちの一つ，「世界危機中的人類」(「華僑日報」1961年２月８日，のち注③所収，178頁）で，この徐復観の日本評論は，彼自らは，とりとめもなく書き散らしたもので，単行本に収録することをためらっていたと述べ，そのかわりに，人類未来に対する構想を書き，人類が自分の歴史に関心を持ち，新しい観念を生み出し，新しい努力で現在直面している世界性の危機を切り抜けることができるものを書きたいと述べている。逆に言えばこの「東京通訊」には日本を題材にしつつ更に一歩視点を広げ，現代化・盲目的な西洋化を進める日本を契機に，人類の未来への根源的な問いを萌芽する内容であるとみてよい。さらに言えば，この「東京通訊」に限らず彼の現代日本に関する論評は全て日本に現代が直面する人類の危機を見ているとも言える。この一連の評論で彼が述べていることを要約して言えば，たとえ今現在民主や自由という人々に普遍的価値観として迎え入れられているものであっても，それを無反省に適用されると，そこに現代の社会的危機が生じると見る。

徐復観は西洋の近代概念民主や自由，科学についても価値を認めて，長期の専制に民主や自由を欠いた中国を含む東方にも導入されるべきだと主張する。ただし，西洋の民主や科学が万能ではなく根本的欠陥があり，その西洋の民主や科学の欠陥を質す，あるいは救うことが出来るのは儒家思想を中心とする人文的精神だと考えるわけである。例えば「民主政治にはかならずある価値観による支えが必要である。そうしてこそ初めて民主政治が正常に作用するのである。」⑤といい，もしこの人文的精神という価値観を喪失すると，民主や自由の聞こえのいいスローガンの下，多くの人が悪事を行い，その結果として民主的政治が破壊されたり，形式上は存していても内実は賄賂，談合，恐怖等により水面下に政治が運営されるといった偽装民主が行われたりする。その行き着くところは，徐復観は「こうした状況下で，全体主義と暴力主義が横行するのである。」(同上）となる。このことは中国の民国以来の政治的状況，あらゆる分野における社会状況の様相が歴史的にそのこと証明していると彼は考える。こうした物質に対するコントロールが価値によってなされないとき，人はただ物欲のとりことなり無秩序に陥る。まさに社会混乱や民主的社会の混乱の根本原因は「現代の危機の基本的原因は人生価値の

喪失によるのである」（同上）と徐復観は言う。もともとが西洋の民主主義がホッブスの解く人間は「狼と狼の対立」であり，「万人が万人に対立する」と措定し，この世界観を端緒に置き，「観念」として発達した思想であるから，盲目的な民主主義の受容だけでは利益・利害の衝突を免れ得ない世界を招来するのだと考え，従って「民主政治が儒家精神の復活とそのより高い根拠となるべきである。」⑥と徐復観は考えていたのである。

### 3－2　日本批評の具体例

次に，徐復観が日本を扱った評論のなかから，彼の儒教的批評精神が表れている具体例を挙げてみよう。

1954年に造船疑惑という汚職事件が起こった。これに対して，『論語』里仁篇の「過ちを観れば，斯に仁を知る」という観点から評論を加えている。そもそも論語のこの言葉の意味は，過失が生まれた方向性，過失に対して採った手段から相手を観察し，仁に近いか遠いかを見るという考えである。この観点から見ると，一人当たりの金額はたいしたことがないながらも日本を揺さぶる大事件となったことに，日本に汚職の概念が理解されていると評価し，翻って，ほかのアジア諸国はまだ汚職の概念を真に理解するまでに至っていないと見た。また，彼は事件が与党議員によって引き起こされても司法機関は独立性を保っていることに驚く。これは徐復観は国民党の訓政体制の下，国家よりも党が優先され，その党とても蒋介石の私党にすぎず，結局，一個人の思惑が国家に優先される状況下の人民の不幸を批判したのである。アジアのどの近代国家も法治を唱えないものはない。しかし，法律が付与した職責に忠実に，人の良心に従った行動が日本に出来て，当時の他のアジア諸国では難しいのは何故かと問いを重ね，「私の答は，日本人はすでに国家の概念を養成し，政府の機構は国家のものであり，一個人，一政党に属するものではないと考えている」⑦と言う。逆にアジア諸国の政治的落伍は正しい国家観念が存在しないからだと看破し，日本に法概念が存在し，国家概念の存在することを「東洋の先進国家として十分羨ましく，賞賛しないわけには行かない」（同上）とアジアの先行者の姿を日本に見るのであった。

また，田中角栄の金脈事件と首相辞任に触れて，この辞任は『大学』でいう「天子より以て庶人に至るまで，壱に是れ皆な修身を以て本と為す」あるいは「其の本乱れて末を治むる者，未だこれ有らざるなり」という聖人の言葉が現代にも活きていることを再確認している⑧。むしろこの観点による政治が現代こそ必要なのだという。これら贈収賄や不透明な政治スキャンダルは現代日本やアメリカ（徐復観はウォーター事件の論評を通じ同様の趣旨を述べている）の民主制度のもとでは，政治および政治家には身を修めて高い品格，人格が求められ，その個

人的修養の実現を通して，より全般的な清潔な政治環境を生み出すのだと言う。⑨これは民主政治と儒教道徳が結びつきえる親和性を述べるとともに，より積極的に現代民主政治制度の下，伝統的儒家思想が有効な価値を有することを述べている。この日本の汚職事件に対し，祖国中国の歴史では，いつの時代でも腐敗は腐敗を呼ぶ後退現象が発生するばかりだと徐復観は，自国の政治への警鐘を鳴らし，田中首相の辞任，ロッキード事件の発覚を評論し，日本の世論の力量，日本の司法の独立性の存在している点に肯定的評価をあたえ，最後に歴史的総括として「革命政党の失敗は恐怖政治にあり，保守政党の失敗は腐敗行為にある」と結論づけている⑩。

徐復観は第二次大戦後，世界は全体主義と暴力主義の横行により，民主主義の没落という危機に直面していると見た。当時の日本はその弊害の見本市のように彼の眼に映っていた。過激な手段で自己目的の達成を図ろうとする日本の一部勢力が安保闘争，学園紛争，連合赤軍による浅間山荘事件と次々に起こし，「日本の民主の根は深くなく，日本人の性格の二極化が，暴力主義の温床である。」⑪と日本の民主主義の未熟さと，伝統と断絶した世代の対立に混乱の原因があるとした。日本連合赤軍が十二名の同志を殺害した事件では，徐復観は，「中国文化は具体的生命に立脚した文化であり，あらゆることは具体的生命にもとづき，具体的生命の自我の完成を目的とするものであると言う。そして決して抽象的な何物をもこの具体的生命の自我完成への目的に取って代わることが出来ないとも述べて，孟子の“一不義を行い，一無辜を殺して天下を得るは為さざるなり”」⑫と儒家意識を提示して，現代の危機に警鐘と解決の出口への方向を示すのであった。翌年，この事件の主犯，森恒夫が東京拘置所で自殺したが，それは「観念（イデオロギー）と良心の衝突の結果」⑬とみなし，儒教でいう良心（生命本体）と西洋の観念との葛藤と見て，最終的に良心の発現による自殺であるとし，彼の自殺を通じて，また誰もが良心を本来的に持つことを確認している。

## 4　次なる問題提起の起点として

上述のように徐復観にとって，現代日本は，彼の儒教的意識に立脚しながら正（司法の独立，国家意識）・負（暴力主義，人文価値なき民主）の西洋的民主を映し出す思想空間であった。こうした東洋における西洋の思想・制度の混じり合う場としてみる日本観は，その後の現代新儒家にも引き継がれてゆく点を最後に指摘しておきたい。

たとえば韋政通においては，台湾の民主と自由思想を日本と比較して，日本を肯定的に論じているし⑭，盛邦和は明治以降の近代化と経済発展の成功を西洋化と日本儒教の融和の成功によるものだという東アジア新儒教の一つの例としてみている⑮。一方，新儒家でも最も文化保守主義に近い蔣慶になると，近代日本は西洋の思想とくにダーゥイニズムという病に感染し帝

国主義に走ったのだと言い，現在もなおその迷妄にあると断じる。⑯彼ら新儒家自身の民主，自由，科学といった西洋的価値観への距離がそのまま反映している存在が日本と言えなくもないが，いわば徐復観から現在に至るまで，現代新儒家たちにとって日本は，東方（嘗ては儒教文化を有していたと同義）に位置しながら西洋的価値観を受け入れた先行例（融合，矛盾，成功，汚染等等）として格好の分析対象の如くである。このテーマについてもいずれ改めて詳しく論じてみたい。

また，今回，徐復観の留日時代の事績と戦後日本の政治・時事に関する批評を見てきた。ただ，今回紙幅の関係上取り上げることができなかった日本文化に関する批評は次の機会に論じる。

## 註

① 「漫談魯迅」『中国文学論集』1974年，学生書局，陳克艱編『中国知識分子精神』所収，華東師範大学，2004年9月，80頁
② 「東瀛漫憶」「明報月刊」第7巻第6期，1972年6月，胡暁明・王守雪編『中国人的生命精神』所収，華東師範大学出版社，2004年2月，217頁～221頁
③ 「ゴミ箱の外」「新聞天地」第1455期，1976年1月，李維武編『徐復観文集』第1巻所収，湖北人民出版社，2002年4月，309頁～331頁
④ 『徐復観雑文』自序，注③所収，369～370頁
⑤ 「中国人文精神与世界危機」注③所収，174頁
⑥ 「儒家政治思想的構造及其転進」注③所収，117頁および122頁
⑦ 「従貪汚事件看日本政治」「華僑日報」1954年3月4日，姚大力編『中国的世界精神』所収，華東師範大学出版社，2004年2月，116頁
⑧ 「壱是皆以修身為本！—略評日本田中政権的短命」「華僑日報」1974年12月3日，注⑦所収，137頁
⑨ 「迷失了的日本自民党」「華僑日報」1976年9月8日，注⑦所収，140頁
⑩ 「中国人文精神与世界危機」「華僑日報」1971年1月10日，注③所収，173頁
⑪ 「暴力主義的去路」「華僑日報」1972年3月11日，注③所収，237頁
⑫ 「在日本暴力主義的背後」「華僑日報」1972年3月19日，注⑦所収，122頁
⑬ 「観念，良心—森恒夫的自殺」「華僑日報」1973年1月20日，注⑦所収，131頁
⑭ 『中国思想伝統的創造転化』雲南人民出版社，2002年9月，344～345頁
⑮ 「新儒学，新儒学区与東亜発展」『解体与重構』華東師範大学出版社，2002年9月，457～471頁
⑯ 「中国文化視野下自由与民主与日本存在的問題」蒋慶・盛水『以善致善』上海三聯書店，2004年4月，214～222頁

論者は勤務校より平成17年4月から一年間にわたり海外研修の機会を与えられ，中国人民大学での研究に従事した。本論考は，海外研修の成果の一部である。得難い機会を与えていただいた当局にこの場を借りて謝辞を呈します。